

試験3日前の放課後、雛は相談があると担任教師と2人きりで生徒指導室にいた。

「ねえ、いいでしょ先生？ ちょっとくらいさ〜」

「な、何言ってるんだ。そんなこと出来るわけないだろ、蝶野」

生徒指導室は素行が悪い生徒への指導だけではなく、進路や生活相談などにも使われる部屋で、狭い部屋に机を挟んでソファが2つ並んでいる。

雛は教師と対面に座るのではなく、その隣に座って身体を密着させていた。

「そんなこと言って、さっきから全然抵抗してないじゃないですか。本当は期待してるんですよ？」

「そんな訳あるか。俺はロリコンじゃない。女子高生なんかに……お、おいっ！」

今までさりげなく教師の太ももを撫でていた雛は、その手をゆっくりと股間の膨らみへと伸ばしていく。

腕に柔らかい胸の感触を押し付けられていた教師のそこは、既に十分に熱気と硬さを持っていた。

「あははっ、身体は正直だね」

「お、お前……教師にどういうつもりだ？ そういうキャラじゃなかったろ……こんなことして、部活の方は……ううっ？」

「そんなの忘れちゃって、気持ちよくなっちゃおーよ。誰も見てないし、誰にも言わないよ」

雛が教師の耳元で息を吹きかけながら、ぺろぺろと耳を舐っていく。すると優しく触れている教師の股間がびくびくとズボンの中で震えるのが分かった。

「ほら、見て♪ 先生のために大サービス。レオタード着てきちゃった」

「お、お前……」

雛が制服のボタンを外して胸元をはだけて見せると、ピンク色のレオタードが見える。

「新体操の全国選手の現役JKがレオタードでたくさん気持ちよくしてあげるよ？ テストを横流しするだけで、いいんだよ？ ほら、揉んで……♡」

「や、止めろ……！」

雛が教師の手を取り、レオタードの上から自分の胸を揉ませる。教師は抵抗出来ず、されるがままに乳房に手が触れると、その柔らかさに思わず揉むような手つきをしてしまう。

「っあん♡」

明らかに媚びるような甘い雛の声が、教師の理性と欲望を刺激する。それを後押しするように、軽くさすっていた股間を、雛は手の平で撫でまわすようなあからさまな手つきに変えていく。

「おっきくなってるね、先生。随分溜まってるみたいだけど、彼女いないの？」

「はあ、はあ……よ、余計なお世話だ」

ズボンの中で肉棒をびくびくとさせて息を荒げる教師。しかしもう雛の胸を揉む手は止まらない。止まるどころか、徐々に大胆になっていく。

「ほら、お尻も……」

「う、あ……」

教師の空いている方の手を取ると、雛はスカートの中へと引いていく。すると当然下半身もレオタードを履いており、レオタードの生地感触越しに、雛の尻の柔らかさを感じる。

「ちょ、蝶野……はあ、はあ……」

「あんっ……ああんっ♡ 今は教師と生徒じゃなくて男と女……ぜ～んぶ忘れて楽しんじやおっか」

雛が胸と尻を揉まれながら、教師のシャツのボタンを外していく。インナーの裾も上げて上半身を裸に剥くと、乳首へと舌を伸ばす。

「うっ……ふっ……うう……っ！」

「れろ……ぺろ……ちゅっ……」

とても真面目な新体操選手とは思えないくらいに慣れた舌使いで、雛の舌が教師の乳首を舌で転がし吸い上げていく。すぐに硬くなり尖った乳首を唇と舌で奉仕しながら、雛はズボンの上から、その股間部の先端部を焦らすような手つきで刺激する。

「湿ってきてる……直接触ってあげるね」

「ま、待て。これ以上はまずいって……」

しかしその抵抗の言葉には力が全くない。教師はソファに体重を預けたまま、雛がベルトを緩めるのを見守っている。

「腰、上げて？」

雛にそう言われれば、教師はズボンが脱がしやすいように腰を浮かしてしまうのだった。そして下着もずりおろされて、すっかり勃起して先端部が濡れている肉棒があらわになるのだった。

すると雛は乳首へ更に激しく吸い付きながら、剥き出しになった肉棒を握って上下に擦り始める。

「うっ、ああっ……くっ……」

「そうそう。頑張ってる声は我慢してね。誰かに見られたら大変だから……ちゅっ……ちゅば……」

雛の手つきは熟練しており、教師の反応を見ながら巧みに緩急をつけてくる。カリの部分に手が引っ掛かり、そこで教師がくぐもった声を漏らせば、手の動きを小刻みにしてそこを重点的に責めてくるのだ。

「うっ……はぁ……はぁ……ち、蝶野……」

「ふふふ。もうイっちゃいそうな顔してるね。でもせっかくの機会だし、手だけじゃ勿体ないよね？」

意味深に笑いながら雛は言う。すると制服を脱ぎ捨ててレオタード姿になると、教師の膝の上に身体をのせて向かい合う格好になる。そして肩紐をずらして、ポロンと乳房をさらけ出すと、また教師に触らせる。

「私も濡れてるの、分かる？」

「ううっ……くっ……」

レオタード越しに肉棒に雛の未成熟な女の部分が触れてくる。そこは雛の言う通り熱気と湿り気を帯びているのが分かった。

「テスト問題が欲しいのも本音だけど……だけど、それ以上スケベなこと好きなの♡ 先生

を誘惑して本気で興奮してるのっ♡ 先生もスケベ好きでしょ？ テスト問題ちょうだいっ！ そしたら本番は出来ないけど、このままきも〜ちいい素股で天国にイかせてあ・げ・る♡」

雛は耳元で囁きながら、ゆっくりと腰を動かして優しく肉棒を刺激する。汗と愛液でぐっしょりと濡れたレオタードの生地が、肉棒に絡みついてくるように甘い快感を与えてくる。

発情した雛の体臭とシャンプーの混ざり合った匂いで、教師も理性を完全に溶かされる。

雛の誘惑の言葉を受け入れるかのように、両手で雛の尻肉を掴むと腰を動かして、雛の股間へ肉棒を擦りつける。

「ああああんっ♡ 硬いっ……♪」

グッと尻を引き寄せられると、生地越しに性器を密着させて擦り合う2人。教師は腰を下から突き上げるように動かし、雛は教師に抱き着きながら、動く肉棒に割れ目を擦りつけるように腰を前後に振る。

「ねえ、胸も♡ おっぱいもセクハラしてえ」

「はあ、はあ……蝶野っ……」

熱っぽい吐息を吐きながら雛が言うと、教師は触れていた雛の乳房を揉みしだき先端部を指で刺激する。大きさは控えめだが、柔らかさも弾力も充分で、擦り合っている雛の秘部の熱が増していくのが分かる。

「っんあああ♡ セ、先生のおちんぼっ……また硬くなったの分かるよ♪ はああ……セクハラ、最高っ……♪」

うっとりとした瞳を閉じながら、教師の手と肉棒の感触に陶醉する雛。そこにはテスト問題を手に入れて成績を上げようとする打算的な考えはなく、ただ純粋に性の快楽に身をゆだねている雌の姿だった。

「う、ううう……蝶野……」

「ん？ どうしたの、先生？」

股間に押し付けられる肉棒がびくびくと震えて射精が近いと察したとき、突然教師が腰の動きを止めたことに雛は首をかしげる。

「た、頼む……テスト問題はやるから……」

息を荒げながら、すっかり雛の誘惑に屈した教師に雛は笑みを浮かべると、彼の唇に指をあてる。

「先生から言ってくれるなんて嬉しい♪ でも本番はダメですよ。私、これでもまだ処女なんですから。あとキスもだめ。ちゃーんと取っておかないといけないから」

いたずらっぽく雛がそう言うと、教師はもどかしそうな表情で呻く。それを見て完全に優位な立場にいることを確信した雛は、目元を細めて笑みを深くする。

「でも、何でもダメじゃかわいそうだし……それじゃ、生素股で我慢して下さいね」

そう言いながら、雛が股間部の生地を横にずらす。雛の大事な部分を保護する生地はすでに汗と愛液でベタベタになっており、糸を引きながら淫靡になっている雛の割れ目をさらけ出すのだった。

雛はその潤った割れ目をぴったりと教師の肉棒に密着させる。

「うあっ！」

「どうですか、教え子の現役 JK のおまんこは？ マン汁グチュグチュですっごく気持ちよくなってるの……ねえ、動いて？」

雛が教師に抱き着きながら、耳とクチュクチュと舐りながら囁く。すると教師もたまらず雛の背中に腕を回しながら、腰を動かして肉棒を擦りつける。

「ああんっ♡ あんっ♡ あああっ♡ 気持ちいい……やっぱバイブよりも生おちんぼの方が熱くて硬くて、いいよおっ♡」

わざと教師に聞かせるように、熱い息を吐きながらクラウディアが言う。そんなクラウディアの性事情を聞かされれば、教師の方も興奮が収まらない。

「うっ……おお……蝶野、気持ちいいっ……！」

「ふふっ、先生もノリノリだね。んあああっ、激しいっ……あ〜、イク♡ イキそうっ……先生もイキそうだったもんね？ 一緒にイク？」

雛の誘惑するような口調に、教師は必死になってうなずく。そうやって年上の雄が自分に従順になる姿に、雛はゾクゾクとするものを感じながら、一気に腰のグラインドを激しくしていき、お互いの快感を高めていく。

「っく、ああっ！ だ、ダメだ……イクぞ、蝶野！ もう出るっ」

「はぁ、はぁ……おちんぼ、硬くてびくびくしてるっ♪ うん、いいよ……一緒にイこうっ、先生っ♡ あっ……イク♡ おまんこイっちゃう♡ 先生にセクハラされて、スケベおまんこイっちゃうの♡ イクっ……♡」

割れ目を押し付けながら擦り合い、愛液のぐちょぐちょという淫靡で卑猥な音を部屋内に響かせながら、しかし絶頂の声はそとに漏れないように必死に噛み殺す。そんな中雛は割れ目の間で限界を向けて痙攣しながら精を吐き出す肉棒の感触を感じるのど同時、自らも膣肉を痙攣させて絶頂に達するのだった。

「あっ、はぁ……♡ あっ……いいっ……すっごい気持ち良かったぁ……」

目の焦点が合わず、だらんとだらしなく舌を伸ばして、絶頂の余韻に溺れる雛。腰もカクカクと激しく痙攣している。

「はぁ、はぁ……ち、蝶野……う、ううう……」

雛の下では、射精して理性を取り戻した教師が、後悔の混じったような声で呻くのが聞こえた。これがいわゆる賢者タイムという奴だろう。

——全て、雛がここまで出来るように『特別授業』をしてくれた尾太郎の言う通りだった。男なんて教師だろうがなんだろうがチョロいものだ。

雛は満足げな表情を浮かべながらぺろりと舌なめずりする。

「それじゃ先生、約束だよ。テストの問題と解答ちょうだいね。ちゃんと約束守ってくれたら、今度はお口でしてあげてもいいかも♪ あ、当たり前だけど誰にも言っちゃダメだよ？」

けらけらと明るく笑うその声は、言っている内容を気にさえしなければ、教師もよく知っているいつもの通りの蝶野雛だった。

しかしそれは見た目だけ。表面上だけの雛の姿だった。

今の雛は——

(はぁ～……セクハラは興奮して気持ちいいし、成績も簡単に上がるし、本当に最高♪ これでテスト 10 位以内に入ったら、尾太郎先生のご褒美処女喪失ラブラブセックスかぁ……楽しみだなあ)

歪んだ性癖で妄想を掻き立てながら、絶頂に達した直後にも関わらず、まだ物欲しそうな雌の顔をしていた。